



# 決行 前夜



制作  
著

ファムファタル総合案内所  
はかる

多分、お母さんは出かけてる。

家の電気が付いてないからじゃない。

昨日、財布から数万円抜かれてたから。何日かは彼氏のところに行くつもりなんだろうなって。……思った通り、扉に鍵は掛かってなかった。

鍵を開けて家の中に入る。外から見た通り、家中真つ暗。カラッポのペットボトルの山。カップラーメンたちの抜け殻。丸めたティッシュ。それから試供品の美容液の袋が、足跡みたいに床に散らばっている。

いつも通りの風景だったけど、今日は片付けようと思った。

愛梨は明日からしばらく家に戻ってこない。ずっと戻ってこないわけじゃないけど、長く帰らないつもりだから、なにかしておきたかった。

自分でだろう。……気まずい？のかもしれない。

自分だけ、この地獄から、底から逃げ出すことが。お母さんから逃げようとしていることが、気まずくて、悲しいから、せめてこれくらいはしてあげたいという気持ちになったのかもしれない。

こういう感覚のこと、なんて言うんだっけ。

悪いなーって思うんだけど、止めるわけにはいかなくて、でも、苦しくて……。そうだ、後ろめたい、だった気がする。多分。

ゴミが半分溜まった袋を引きずって、テーブルの前に持ってくる。分別とかはよく分からない（お母さんも多分適当にやってると思う）から、次々袋にゴミを

放り込んでいく。嫌いな野菜を、噛まずに飲み下すように、何も考えないように、次々、次々。

……あ。お母さんのリップ。危な、これまで捨てちゃうとこだった。失くすと悪いから、どこか別なところに置いておこう。そう思った時だった。

扉の向こうで不機嫌そうな女の声。お母さんの声だ。

部屋の電気を付けないまま片づけをしてたから、まだ愛梨が帰ってきてないと思つて鍵を開けようとしたみたいで、なんだ、開いてるじゃない、という声が聞こえてくる。

少し間を空けて、ドアノブが回る音。ギー、と耳障りな音がして扉が開く。思った通り派手なメイクで、着飾ったお母さんと目が合う。

愛梨、いい事してるのに。いたずらが見つかったみたいない気持ちになつて、全然動けなくて。おかえり、とも、何も言えなかった。何か言おうと思つた瞬間に、愛理はお母さんに殴られていた。

「何なの!! 当てつけのつもり!! 電気も付けないでコソコソコソコソ、片付けないかして!」

「あ……ごめんなさい」

反射的に謝つた後、しまったつて思つた。お母さんにとつて、「ごめんなさい」はもつと殴つていい、の合図。愛理が悪いことをしたつて認めたんだから、いくらでも罰を与えていいということ。あちこち、どこがどうつて分からなくなるくらい、叩かれる。

叩かれてるのは愛梨なのに、お母さんが短く悲鳴を上げた。

「ちよつと！それあたしの口紅ッ、返しなさいよ！泥棒！泥棒！！」

お母さんの長い爪が、リップを取り返そうと愛理の手を何度も引かく。殴られたときに、無意識にリップを握り込んだじゃってみたいで、それが余計お母さんの機嫌を悪くしてしまったらしい。

盗むつもりなんかない、片付けようとしただけ、そんな風に言ってもどうせ無駄。愛理はすぐに手を開いて、お母さんのリップを開放する。お母さんは床に落ちたリップをすぐに拾って、まるで愛梨から守るみたいにカバンにしまい込んだ。

「意地汚い……信じらんない、あんた、本当にお父さんそっくりね……」

お母さんがお父さんの話をするときは、もう殴らない、の合図。疲れて、叩く気が無くなつたときに、トドメの一言のつもりでいつも愛梨に吐き捨てる。

愛梨のお父さんは、愛理が産まれる前にいなくなつた。

死んだわけじゃない。酔っぱらっていた時に聞いた話。

これは、お母さんがグズグズに酔っぱらっていた時に聞いた話。でもお父さんお父さんとお母さんは、若い頃、バーを開く予定だったみたい。でもお父さんはその開店資金を持って、逃げた。お母さんから。お母さんのお腹の中にいた愛理から。

今思うと……最初からバーなんてやるつもり、なかったのかも。当時人気ホステスだったららしいお母さんに適当にお金を作らせて、それを上手

いこと奪ってただけ……だったんじゃないかな。

お父さんと出会った時点で、お母さんと愛理の運命は決まっていたんだ。寂しくて、貧しくて、そんな母娘には、世界は冷たい。誰も助けてくれない、行き止まりの運命。

でも、愛理はその運命から逃げる。……いい仕事を紹介してもらったんだ。五日間頑張れば、いっぱいお金を貰える仕事。いっぱいお金があれば、家から出ていける。

愛梨には銀行口座？も、カード的な物も無いし、あんな大金、また盗まれるんじゃないかって心配だったけど……運営の人は、必要になるときまで預かってもいいって言うてくれた。それなら大丈夫。絶対お母さんに取られたりしない。お母さんはドレスサールの前に忘れてったらしい何かをカバンに放り込んで、また玄関に向かう。

「……しばらく帰らないから。お金、あるでしょ」

「うん」

「……汚いお金」

「そうかな」

じゃあ、綺麗なお金ってどこで貰えるの？  
誰が愛梨みたいなバカを雇ってくれるの？

お金貯めて家を出て行こうって決めた時。一応、コンビニとか飲食とか、フツツのバイトをいくつかやった。けど、愛理には上手く出来なかった。みんなと同

じように頑張つてゐるのに、みんなと同じように働くことが、無理だった。遅刻。寝坊。シフトのすっぱかし（ワザとじゃないんだよ、うっかり忘れちゃうの）。ちゃんと出勤できても、まだまだ問題だらけだった。

メモを取ったのに、そのメモを失くしたり。メモがあつても、なんて書いてあるか自分で分かんない。大事な鍵をレジ横に置きっぱなしにしちやつたり。置いてかないように、落とさないように、いつの間にかポケットから消えてて。怒られてるときも、一生懸命話を聞いているのに、ちゃんと聞いているの、って何度も怒られた。

だから、みんなとは違う方法でお金を貰うしかなかった。

最初はバイト先の店長。今考えるところとちよつと少ないなつて思う金額だったけど、それでも自分の力で稼いだお金って思うと、すごい嬉しかった。愛理にあってなガミガミ怒つてた店長にずっと、可愛い可愛いって褒められるのも、まあまあ気分良かった。

でもやりすぎちゃつて、バイト先のみんなにバレて……愛理はそこにいられなくなつた。別に愛理はなに言われてもどうでも良かったけど、もう店長が相手してくれなくなつちやつた。

それから愛梨は店長以外の適当なおじさんを探して、お小遣いを貰つてゐる。

お母さんは、愛理がどうやつてお金を稼いでいるか知つてゐる。ホステスとして稼いできた自信があるから、誰にでも体を売る愛梨のことを、軽蔑してゐるんだ。でもさ。どうせホステスつたつたつて、ちよつと気前のいい客がいればセック

スしてたんじやないの。そうやって客を繋ぎ止めて、お金を巻き上げてたんじやないの。それって愛理と何が違うの。

そんな言葉をぶつけてやりたかった。

木で出来た安っぽい扉が、愛理とお母さんとを強制的に別れさせる。おかげで愛理は、お母さんみたいに汚い言葉を吐かずに済んだ。

片づけをする気が無くなったから、今日の晩御飯のことを考える。……考えようとすると、何も食べなくなかった。ご飯を奢ってくれるおじさんもいるし、お金もたくさんあつて、愛理はなんでも好きな食べられるのに。

全然食べたたくない。そんな日が、最近は特に多かった。

代わりに変な妄想が愛理の頭の中で、ぐるぐる。  
あー。お金持ちの家に生まれてたらな。出来れば、お父さんもお母さんも、両方いて……。お金持ちだから、もう何人か子供産んでくれて、妹や弟がいたかも。そうすれば、いつも遊び相手がいて、さみしくない。おままごとも鬼ごっこでも、毎日何でもしてあげる。

……。でも、こんな事今さら叶いっこない。お金持ちと結婚することは、もしかしたらあるかもしれないけど、お金持ちの家に生まれ直すことなんかできない。それに……。大体のお金持ちは、お金持ちとくっつくように出来てる。そんなの愛梨でも知ってるよ。

「んっ……。頭いた……。うー、いてて……。一  
とにかく、明日。明日からの連休が大事。頭が痛いとか、そんなこと言ったら

んない。すっかり仕事をこなして、お金をもらって……。お金持ちじゃなくてもいいから、普通の生活を手に入れるんだ。

ここにずっと縛られてるなんて、もう無理。

新築じゃなくてもいい。オートロックもいらぬ。お風呂とトイレが一緒でもいい。でも、散らかってない家が。洗面台も、便器も普通に白くて。踏切の音なんか、全然聞こえない家。それで、ふわふわの力で十分なんだ。ちよつとだけ可愛い布団カバーを選んだりできたなら、それで